

## 東北視察報告

大坂 理

### 1. 印象に残った場所

今回の視察は青年部起案者並びに現地案内役のエイト日本技術開発橋尾氏のご尽力で、初めて東北の被災地に赴くものにとっては、短期間であったが現地でしか感じ得ない貴重な体験をさせて頂いた。

正直なところ視察ポイントに向かう車窓からはあまり被災地という印象を受けなかった。どす黒い波が海岸や河川を遡上し家屋や車両を流し去り、火災が発生する様子を映像で何度も見ていたので、がれきが撤去され更地に下草が生えた風景を見たら、2年半経過すればここまで整備できるのかと思った。

しかし、気仙沼鹿折地区の打ち上げられた船体とともに、草に隠れて建物基礎が多数存在しているのに気づき、震災前はここには住居があり人が居て生活の場があったのだと思うと、現状の更地が異様に思えた。



打ち上げられ船体と  
建物基礎

また、本吉地区では、JR 気仙沼線（陸前小泉）の橋脚の倒壊や駅舎が流れ去った跡、草が生い茂った広々とした荒れ地に見え隠れする建物基礎を見ると、一地区まるごと壊滅的な被害を与える津波の威力に衝撃を覚えた。



JR 気仙沼線と  
住宅地跡

今回の視察では被災して建物や土木構造物が壊れている様子を多く見る事ができた。同時に、そこにかつて町があったとは写真を見なければ分からないところも見学でき、「今後どうやって町や地域を復興するのだろうか」といろいろ考えさせられた。

## 2. 復興状況 - 特に住宅整備について -

復興庁によれば、岩手、宮城、福島の被災 3 県の道路や鉄道、水道などの社会基盤の復旧は、東京電力福島第一原発事故の影響で居住が禁じられた地区を除き、ほぼ完了としている（海岸対策除く）。また、3 県で発生した計 1635 万トンのがれき（災害廃棄物）についても、岩手、宮城分は来年 3 月末までに処理が完了する予定である。

一方、今回の震災では 27 万 8000 人の避難者数があり、その生活基盤となる復興住宅（災害公営住宅）や復興まちづくりの進捗状況については、復興住宅の着工率は 60%、工事の完了率はわずか 2%にとどまっている。復興まちづくりの防災集団移転は着工率が 51%で完了率は 4%。土地区画整理は着工率が 39%で完了率はまだ 0%である。参考までに、阪神大震災では同時期において復興住宅は総計画戸数の 37.5%が供給されていた（2013/12/3 付け読売新聞より）。

以上のように、復興住宅建設や集団移転などの公的再建は容易に進んでいないのが現状で、その原因として、地形的に安全な場所の確保、用地取得等の事務処理、それを行う職員の人手不足等が挙げられている。公的再建の遅れは、それを待てない被災者（特に経済的に余裕がある人や若い世代）の自力再建を促し、人口流出や地域衰退につながる新たな課題も指摘されている。

## 3. 今回の視察を技術者としてどう活かすか

今年は島根県西部で豪雨による災害が発生し、当社では 8 月初旬よりその対応に追われ酷暑の中、休日返上で現場作業が続いていた。

そのような中、9/13~16 を東北視察で会社を空けることは心苦しかったが、1 度は行きたいと思っていたので東北へ飛び、やはり、そこで得たものは大きかった。

災害対応について、被災者（公共施設等）がいて、それを支援（復旧）すべき行政があり、さらに技術者が現場サイドを支援する。この基本的構図は災害の大小にかかわらずそう大きく変わらない。

技術者としては、その使命を意識し誇りを持って、責任ある判断と行動を取ることでその責務を果たすことに尽きる。

震災復興の現状や計画について発信される情報は容易に入手することができるので、時々気に掛け、現地の印象を思い出し姿勢を正す（技術者として）機会になれば良いと思う。

復興住宅の建設に関して高台移転は 1 つのキーワードであり、今回の視察では陸前高田市と東松原市野蒜地区でその現場を見ることができた。野蒜地区の高台移転については今回現地を案内して下さった橋尾さんも携わっておられるので、災害規模はどうあれ現場と対峙しておられる技術者として、いろいろ話を聞いてみたい。

以上